

論文

山村集落と野生の自然

川村 誠*・松尾容孝*・関根真理**

Mountain Villages and Wildlife

Makoto KAWAMURA *, Yasutaka MATSUI *
and Mari SEKINE **

Summary

This study provides a map of the complicated environments of behavior and habitat use of wildlife in the presence of man, and man's reaction to the presence of wildlife.

A definition of wildlife admitting some variation is "any living thing that is part of a natural ecosystem." From a historical perspective, wildlife comprises wild animals that are hunted or trapped by man. In the Japanese islands, wildlife habitats have been adapting to a human-influenced environment for a long time.

In mountain villages, the decrease in population progressed rapidly from 1960 to 1970, and after that slowly. At present, agriculture and forestry are inactive in these areas. Further, the rural communities have come to be composed largely of elderly people. On the other hand, as a result of road improvements, people in many villages are able to go to working offices in DID areas. This creates rising possibilities of the return of the younger generation and an increase of permanent residents.

However, lifestyles have already urbanized in rural communities. The agricultural and forestry use of land is retreating every year. So it is difficult to conserve the human environment in co-existence with wildlife.

According to the urban perspective, mountain villages are considered to be wilderness areas in Japan. But in North America, "wilderness" is an area of land generally greater than 1000 ha that predominantly retains its natural character and on which the impact of man is transitory and, in the long run, substantially unnoticeable.

The important point that requires clarification is the circumstances of human habitats in the presence of wildlife. In this study, we did a survey of residents in mountain villages who are in contact with wildlife. The questionnaire consisted of two parts of mapping data. The first part focussed on the forest uses of the residents, such as gathering forest products, mushrooms, mast, wild vegetation, wild flowers, fuelwood, etc. as well as forest work such as planting trees, brush cutting, pruning, thinning, etc, all of which was mapped onto a gathering or working area map. The second part of the survey looked at villager's contact with wild animal species, such as racoon dogs, foxes, weasels, wild boars, white collar bears, wild monkeys, etc.. These were mapped to show the points of intersection.

The test area was a village "Tukuyone" in Wakasa-cho in Tottori Prefecture. All the data was plotted on

*鳥取大学農学部 農林総合科学科 生存環境科学講座
Department of Environmental Science, Faculty of Agriculture, Tottori University

**広島県林務部
Forest Division of Hiroshima Administrative Authorities

the land use map with contour lines.

The results of the mapping show the following:

- 1)The area of forest use is limited near farms, ski slopes or forest utilization roads.
- 2)The plotted area of wildlife contact was noticeably more than the forest use area. This area ranged from the forest edge to rural residences.
- 3)These points of wildlife contact are around rural residences, the sides of rural roads, rice fields, tree planted sites, etc.. Formerly these areas were human living areas and non wildlife-influenced environments.
- 4)In particular, it was found that the plotted points were distributed on the edge of land use types, between woodlands and rice fields, residences and farm land, etc..

The future direction of this study will consider the complex relations between human and wildlife or wilderness species habitats, including further collecting and plotting of map data.

I 緒言

—集落環境への視点—

1990年代に入って、山村集落をめぐる問題の振り子は、経済から環境へと大きく振れたとみることができる。もちろん、1960年代後半からの過疎化の中で、次々生じた課題は何一つ満足に解決されたわけではなく、積み残されたまま現在に至っている。そのため、80年代以後、小康を保ったかにみえる集落生活も、着実に進む高齢化をみれば、21世紀の早期に小規模集落の消失を予感させる。それでも今あえて、経済から環境へ視点の転換を我々に迫るものは、急速に野生化する定住環境である。

過疎化の30年間に、集落生活の経済的基盤は、地域資源を生かしたモノづくりから、通勤による給与所得へと急速に移行した。その間、D I D都市圏と集落を結ぶ道路整備が進み、交通アクセスの改良があった。もっとも、スキーリゾートのように地域に定着的な所得機会を得た集落もあったが一部にとどまる。何れにせよ、60年代まで普遍的に見られた生活、つまり地域資源と生活が密接に結びつき、絶えず人が田畑や山野に出入りする状況はなくなって久しい。集落によっては、耕作破棄された田畑が続き、道刈りや畦刈りが行き届かない。それでも宅地境界や集落道の整理整頓が行き届いている場合、かろうじて人の生活圏の自己主張を認めることができる。しかし、それすら崩れればどうなるのか。

かつて山村集落にとって野生動物とは、何より狩猟対象としての森林資源の一部であった(5)。しかし、野生動物の保護と利用に関して持続的な利用をめぐる議論が高まっている(7)。本研究では、山村を人間-環境系としての地域とみる視点(9)から、野生動物との関係を実証的に理解しようとしている。

ただし、定住環境に関して、野生化とは耳慣れない言葉である。ここで野生とは、人手の入り方の少ない、馴化の程度が弱い状態を指す。また、人為的なコントロールの自由にならない状態を指す。例えば、植物の野生種あるいは野生動物といった使い方である。また、湿潤なモンスーン気候の日本にあって、環境が野生化するとは何より野生生物と人間との関係の変化を意味する。すなわち、野生化とは、人間優位のバランスが野生生物優位に傾くことに他ならない。しかし、野生は自然状態と同義ではない。この点で、アメリカ合衆国で生まれた、Wilderness(ウイルダネス)の思想と政策は興味深い(1,2,3,8)。仮説的に、一方で、集落生活と密接に関連づけられ、人間行動に対応して反応する自然があり、他方で、自然を野生としてみる人間の視点があるとする。両者の交錯する狭間に山村集落が存在する訳で、こうした環境を野生

的自然と呼びたい。

経済生活の確保は定住の必要条件であるが、集落環境の維持には十分でない。農林業生産が後退し、人の生活行動と野外との結びつきが薄れると、身近な生活環境を維持するシステムも変化せざるを得ない。新たなシステムが形成されなければ、いくら快適な住宅が用意され、舗装された道路が都心部にまで通じていたとしても、人は住めない。野生的自然と人とのシステムに今何が起きているかを具体的に理解する必要がある。

II 研究の方法

人と野生動物の多様な行動と意識を十全に知ることは不可能に近い。人の行動はまだしも、野生動物の場合、その生息空間の把握すら多様な方法があり、調査研究は今後の成果に待つところが大きい(6)。さらに、環境対応的な行動を追跡することはきわめて困難といえる。ただし、全てを鳥瞰してモニターすることよりも、生活の上での両者の接点こそ重要である。そこで、新たな方法として人と野生との出会いに着目し、どのような出会い方をしているのかを明らかにしようと試みた。

第1に、出会いを生む人の生活行動の変化を明らかにする必要がある。とくに、日常生活行動の中で森林との接点を明らかにしなければならない。いま、人はいかなる目的でどこへ行くかである。

第2に、集落生活の中で野生動物との出会いを具体的にカウントする必要がある。人はどこでいかなる種類の野生動物と出会っているのかである。つまり出会い調査である。この出会い調査は、出会いの空間把握といえる。

このように人の森林行動と野生動物との出会いを集落内外の森林空間にプロットすることによって、出会いの場を理解することができる。

III 出会い調査の計画と実施

1. 調査対象の集落特性

調査対象とした集落は、鳥取県の東部、兵庫県境の若桜町春米(つくよね)地区である。水系からみて同地区は、日本海に注ぐ千代川の支流、八東川から若桜町内で分かれ、さらに春米川となってその源頭部の最奥に位置する。県境を南北に走る氷ノ山山系(最高峰1510m)の西側山麓にあり、集落の標高は640mである。最寄りのD I D都市は鳥取市であり、若桜町中心部を横切る国道29号線を経て、約1時間強かかる。集落へは国道29号から分岐し、国道482号線となる。しかし、県境越えは旧林道のままであり、事実上、袋小路の状態にある。冬季は最大積雪が3mに達し、総じて通勤圏の限界地域に位置する(11)。

集落全体が傾斜地形にあり、住宅地域は春米川左岸の車道沿いに集村形態を成している。農地は春米川右岸を中心に面積約15haの棚田がある。水稲以外では約5haの畑地があり、一部に大根の作付けが行われている。不在村所有者の林地を中心スギ・ヒノキ造林が行われている。集落の周辺には造林地が広がっている。しかし、1990年世界農業センサスによると、集落内の農家林家39戸の保有面積はわずか47haであり、その内に人工林は44haである。氷ノ山山系の森林の大部分が「氷ノ山後山那岐山国定公園」に含まれ、造林適地は限られている(図1)。

なお、土地利用の中心は、スキー場である。現在、2ゲレンデがあり、それぞれ町営と県内の観光会社による経営である。10軒の民宿をはじめとして、その他レストハウス、駐車場等の

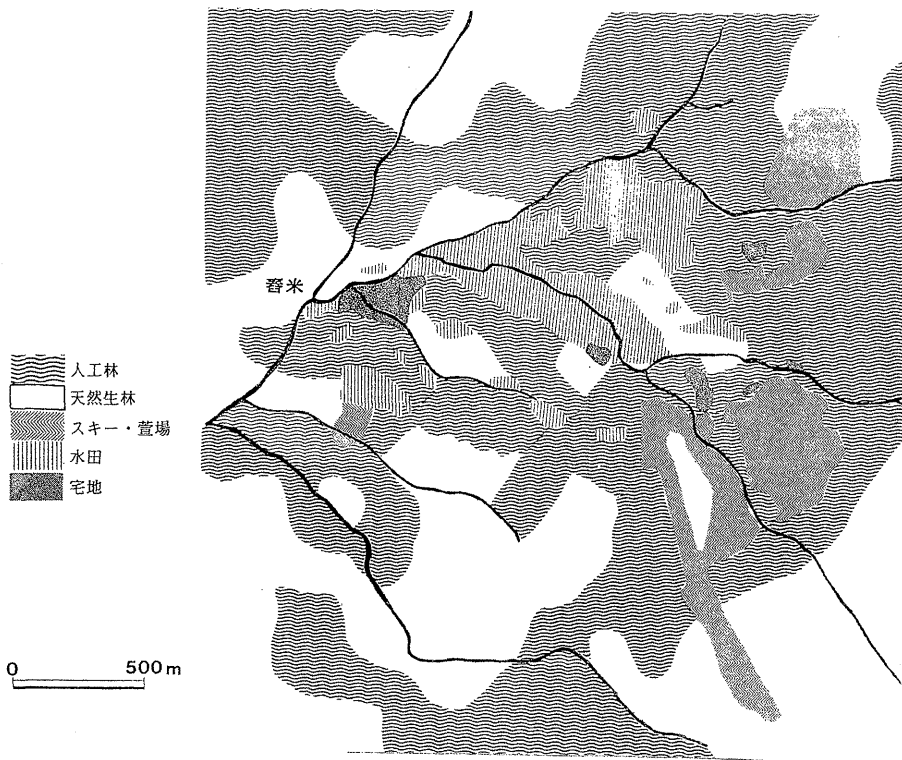


図1 「春米集落」の土地利用の現状

施設は、居住地域に隣接してゲンレンデ付近に散在している。スキーの入り込みは、1990年以後、2つ目のゲレンデ整備にともなって増加し、年間10万人に達している。一方、夏季の施設として野外キャンプ場やバンガロウがあり、鳥取県側からの水ノ山登山の基地でもある。しかし、夏季の施設利用者は、年間4千人程度にとどまっている。現在、県営の自然公園ビジターセンターの建設と周辺のレクリエーション施設整備が進められている。

1996年現在、春米地区の戸数59戸、人口219人である。人口は1960年代末に400人規模から大きく減少した。しかし、70年代に入ってから減少は緩慢であり、25年間の減少は戸数で10戸、人口で68人となっている（住民台帳調べ）。

2. 調査方法

予備調査として集落でのヒアリングを行い、まず集落周辺の森林の利用についてその種目や作業内容を整理した。また、野生動物との出会いについて、集落周辺でみかける動物の種類を整理した。とくに、採取対象の植物名や出会う可能性のある野生動物の名について、集落での呼称を確認した。

次に、予備調査をもとに、集落各戸へのアンケート調査（以下、「春米集落アンケート調査」）を計画した。アンケート内容は以下の3課題を中心に構成されている（図2）。

第1に、集落住民による森林の利用を森林利用行動と呼び、利用目的に沿ってアンケート回答の選択肢を作成した。実際のアンケート項目においては、とくに、山菜やキノコをはじめ採

問 地域の生活と自然についてお答え下さい

1 以下にあげた野生動物の中で、あなた（またはご家族の方）が過去1年間に、見かけたものすべての番号に○印をつけて下さい。また1枚目の地図上でその動物を見かけた場所に、その番号を記入して下さい。

①タヌキ ②キツネ ③イタチ・テン ④イノシシ ⑤ノウサギ
 ⑥モグラ ⑦ノネズミ ⑧アナグマ ⑨ツキノワグマ ⑩ニホンザル
 ⑪ニホンリス ⑫ニホンジカ・カモシカ ⑬ムササビ・モモンガ
 ⑭コウモリ ⑮イヌワシ ⑯フクロウ・ミミズク ⑰ホタル

2 以下にあげた林産物の中で、あなた（またはご家族の方）が過去1年間に、利用したもの全ての番号に○印をつけて下さい。また、2枚目の地図上で、採取した主要な場所にその番号を記入して下さい。

①山菜 ②キノコ ③サカキ・シキミ ④草花・花木
 ⑤下草・採草 ⑥薪 ⑦ヒルガワ（キハダ） ⑧カヤノキ・カヤ
 ⑨クリ ⑩トチノミ

3 あなた（またはご家族の方）が過去1年間に、造林地の手入れ（下刈・除間伐・枝打・伐採など）に行かれましたか。当てはまる番号1つに○印をつけて下さい。また、手入れに行かれた方は、2枚目の地図上にその範囲を線で囲んで記入して下さい。

①手入れに行った → 地図上に記入
 ②行っていない

図2 野生動物との出会い調査アンケートの質問用紙

取事例の多い品目に絞って10品目を挙げ、その採取の有無を問うた。さらに、回答者自身によって採取地点（または範囲）を地図上にプロットする形をとった。

第2に、同じ森林利用行動ではあるが、人工林の手入れについては、作業種を細分化せずに、回答者が何らかの手入れに行った地点（または範囲）を地図上にプロットするものとした。

さらに第3に、野生動物との出会い調査について、出会う可能性のある動物を集落における通称名の形で17種列記し、回答者が出会いの有無と出会った地点を地図上にプロットする方法をとった（図2）。

また、イヌワシについては、1つにイヌワシを見たことの有無を聞くとともに、さらに他の

ワシタカ類と見分けられるか否かを問うた。

なお、上記の利用や出会い調査の対象期間を、過去1年間に限定してできる限りの確な回答を得ようとした。また、回答者の記入する地図は、国土地理院発行2万5千分の1スケールの地形図を拡大集成し、居住地、農地、採草地、スキー場、道路等の位置を書き込んだ地図を用いた。

3. 調査の実施とデータ化

アンケート対象者を18歳以上の住民とし、世帯主以外にも家族から個々に回答を得た。また、アンケートの配布と回収は直接に調査者が行った。1995年9月30日に配布し11月にかけて回収した。配布可能な48世帯を対象に配布し、回収は39世帯から有効回答数94を得た。回答者の内訳は、世帯主35、その他家族59であった。

データ処理の手順については、以下の工夫を施した。第1に、総じてアンケートの集計と図化に際して、データ数が少ないため、メッシュ法などのデータ化は行わず、ベースマップ上に直接、印を付ける方法をとった。第2に、森林利用行動については、一定の範囲を記した回答が多かったため、利用種目毎に各々の回答を重ね、オーバーレイ法によって中心地域を判定した。第3に、野生動物との出会い調査の場合、選択肢としてあげた動物種ごとに、出会い地点をベースマップ上に印し付けを行った。

4. 回答者の属性

男女別では、回答者94人中、48人が男性、46人が女性と、およそ半々となった。年齢構成にばらつきが大きい(表1)。ただし、回答者には40歳台未満が多く、70歳台以上の高齢者はむしろ少ない。次いで、回答者の主な職業では、農業が多い。しかし、農業者の年齢は相対的に高く、60歳代以上が多い。これを兼業や副業種目で問うたところ、やはり農業が27%の他、スキー場勤務が目立っている(表2)。兼業形態を含めて何らかの形で農業に従事している人は多い。

次いで、農業以外の自営業が多いが、この中に民宿・ペンション・ユースホテル経営が含

表1 主な職業別・年齢層別回答者数(18歳未満)

年齢層	主な職業										合計
	農業	林業	その他 自営業	土木 作業	公務員 団体職員	会社員	フリータ	無職	主婦	学生	
10歳代						2	1				3
20			2			2				2	6
30	1		4		2	4	1		6		18
40	2		5	2	2	6			7		24
50	4		5			1		2	2		14
60	11	1		3				1			16
70	5										5
80	4		1								5
合計	27	1	17	5	4	15	2	3	15	2	91

注 「春米集落アンケート調査」による

表2 「兼業・副業」別回答者数

兼業・副業	実数値 (人)	構成比 (%)
農業	25	27.5
スキー場勤務	10	11.0
自営業	6	6.6
土木業	6	6.6
林業	2	2.2
パート等	2	2.2
内職	1	1.1
家事	1	1.1
特になし	36	39.6
その他	2	2.2
合計	91	100.0

注1 「春米集落アンケート調査」による
 2 構成比の内訳は四捨五入の関係で合計と一致しない

まれる。会社員の場合、年齢層は若い。また、主婦層の回答者15人の中で、30歳代6名、40歳代7名と、比較的若い主婦層が居住していることに注目される。

IV 森林利用行動と行動圏

1. 森林利用行動の目的

造林地の手入れの有無については、回答者の46%が手入れに行ったことがあると答えている(表3)。ただし、林産物利用については用材以外の品目が上がっている(表4)。中でも「山菜」が最も一般的であり、回答総数35に対して、91%の回答率を得た。次いで「トチノミ」(トチノキの実)、「キノコ」、「クリ」が多く、それぞれ46%、40%、37%の回答率であった。この「トチノミ」の他、回答率は小さくなるものの「ヒルガワ」(キハダの樹皮)、「カヤノキ」(カヤの実)が回答された点に注目される。

表3 造林地の手入れの有無(過去1か年間)

手入れの有無	実数値 (人)	構成比 (%)
手入れに行った	12	46.0
行っていない	14	54.0
合計	26	100.0

注 「春米集落アンケート調査」による

表4 林産物利用種別回答者数(過去1か年間)

林産物	実数値 (人)	回答率 (%)
山菜	24	68.6
トチノミ	16	45.7
キノコ	14	40.0
クリ	13	37.1
ヒルガワ(キハダ)	7	20.0
草花・花木	7	20.0
カヤノキ	5	14.3
サカキ・シキミ	3	8.6
下草・採草	1	2.9
回答者総数	35	

注1 「林産物」名は調査地の通称名を使用
 2 「回答率」は、各林産物への回答者総数で除したもの
 3 「春米集落アンケート調査」による

2. 森林利用の行動圏

森林利用の範囲を土地利用と関係させてみると、林道など道路付近あるいはスキー場や草地など疎開地に多いことがわかる(図3)。さらに、全体の行動範囲としては、スキー場から、広く山腹側に入った場所がある。しかし、総じて利用行動圏は意外に小さく、居住地、田畑、スキー場および隣接の林地に限られるとみてよい。

V 野生動物との出会いと場所的特性

1. 出会った動物

出会った動物で最も一般的なものは、「タヌキ」であり、回答者の91%に達する(表5)。次いで「イタチ」の60%、「キツネ」57%である。同じく哺乳動物では、「ノネズミ」46%、かろうじて「ノウサギ」37%、「モグラ」31%と回答率は下がる。さらに、「イノシシ」と「ニホン

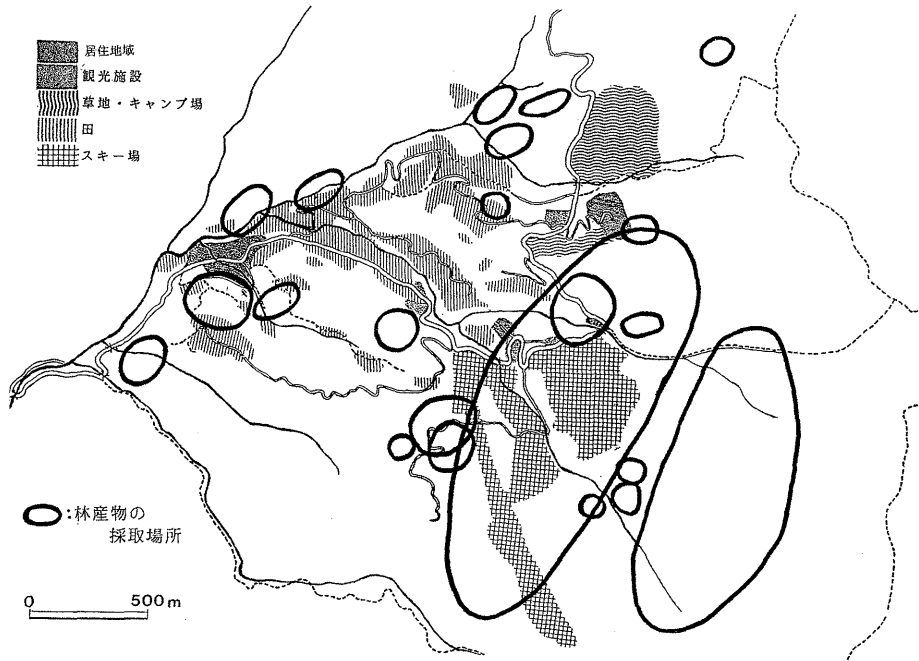


図3 森林利用行動の範囲

表5 野生動物との出会いの有無（過去1か年間）

「動物名」	出会った人 (人)	回答率 (%)
タヌキ	32	91.4
イタチ	21	60.0
キツネ	20	57.1
ホタル	17	48.6
ノネズミ	16	45.7
ノウサギ	13	37.1
モグラ	11	31.4
イノシシ	9	25.7
ニホンザル	9	25.7
ツキノワグマ	8	22.9
フクロウ	5	14.3
ニホンジカ	4	11.4
コウモリ	3	8.6
アナグマ	3	8.6
イヌワシ	2	5.7
回答者総数	35	

- 注1 「動物名」は調査地における通称名を使用
 2 「回答率」は、動物毎の回答数を回答総数で除したものの
 3 「春米集落アンケート調査」による

ザル」が同じ25%，ツキノワグマは23%となっている。その他動物では、「ホタル」が比較的少なく、回答率49%であった。また、「ニホンジカ」や「フクロウ」も出会った人は少ない。「イヌワシ」は、35人中2人であった。

2. 出会いの場所

(1) 「イヌワシ」「ツキノワグマ」

まず、「イヌワシ」の回答2例は、どちらもスキー場からさらに氷ノ山山腹を上った位置にみている。現地は急傾斜の切り立った崖状の場所である。他の場所での現認はない。

「ツキノワグマ」の場合、最も多いのは水田の圃場で出会った例である。また、川筋の対岸に認める例がある。集落の居住地に近い道路沿いの場所で出会っていることにも驚かされる（図4）。

(2) 「ニホンジカ」「イノシシ」「ニホンザル」

「ニホンジカ」は、スキー場の開けたゲレンデ

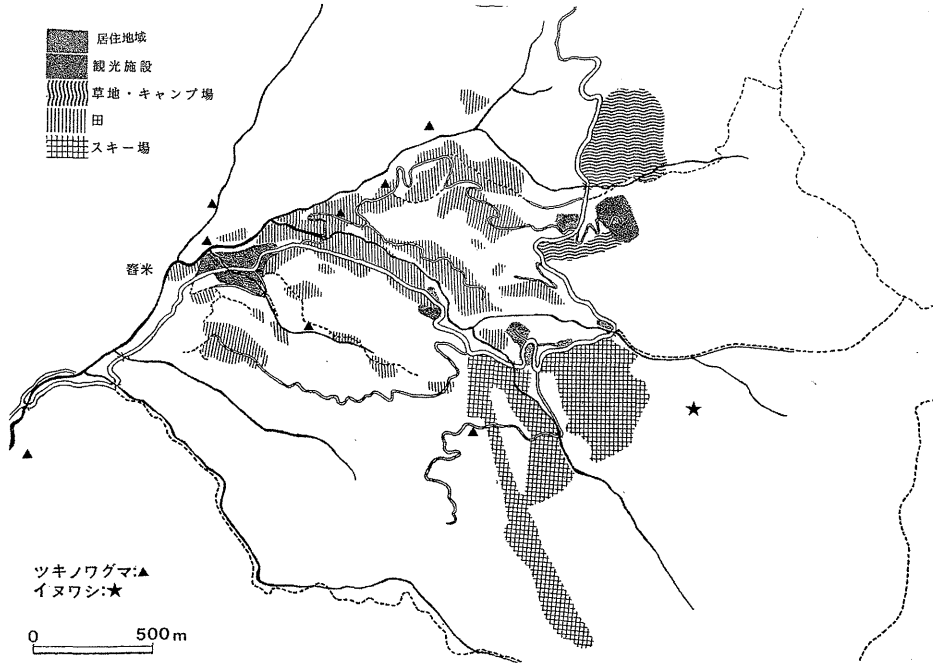


図4 「ツキノワグマ」「イヌワシ」との出会い地点

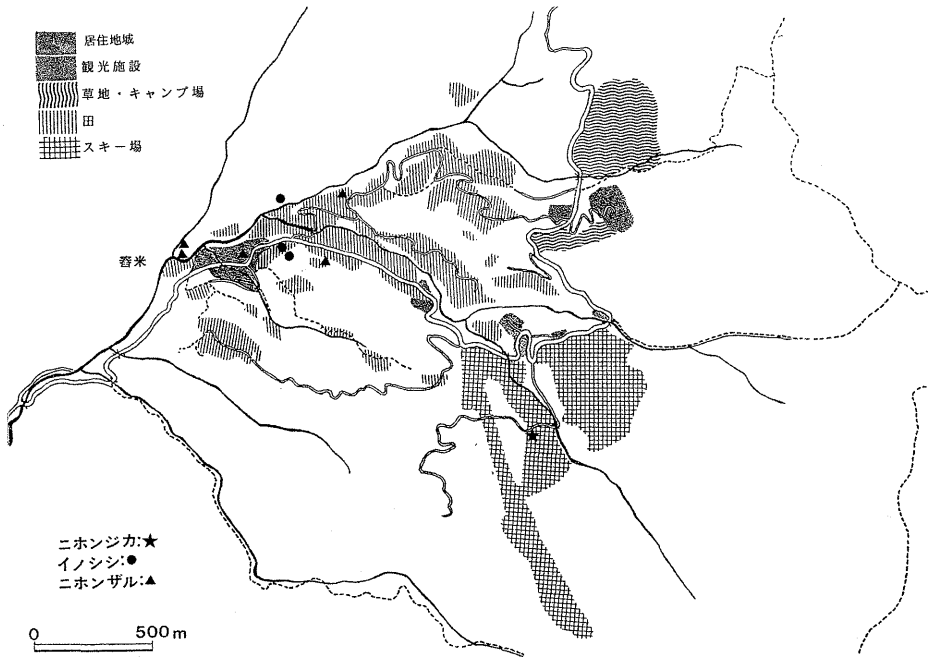


図5 「ニホンジカ」「イノシシ」「ニホンザル」との出会い地点

で出会っている。他の場所での出会いは確認されない。「イノシシ」「ニホンザル」は出会いの範囲はきわめて狭い。「イノシシ」の場合は、居住地に近い水田あるいは畑地である。また、「ニホンザル」も居住地にきわめて近い場所の田畑あるいは川筋の対岸である。さらに注目されるのは、居住地域内でも出会っていることである（図5）。

(3) 「タヌキ」「キツネ」「イタチ」

最も一般的に出会う動物である「タヌキ」をみると、集落の道路沿いが多い。次いで、スキー場のゲレンデの道路沿いである。「キツネ」も「タヌキ」ほどの分布はないが、同じように道路沿いでみられている。また、「イタチ」は居住地域に接した場所あるいはゲレンデの道路沿いでの出会いが多い。このように、「タヌキ」「キツネ」「イタチ」は他の動物に比べ、何れも相当な広がりを持つ。ただし、総じて、集落から下流部への道路沿いからスキー場ゲレンデ、採草地・キャンプ場の範囲である（図6）。

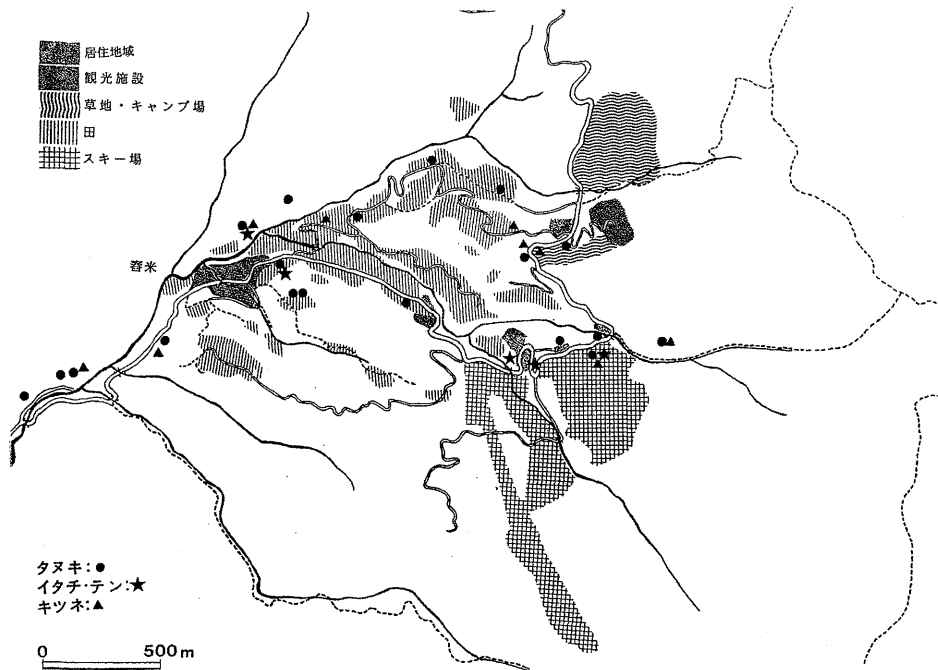


図6 「タヌキ」「イタチ」「キツネ」との出会い地点

(4) 「ノウサギ」「モグラ」「ノネズミ」

「ノウサギ」は道路沿いあるいは道路近くの圃場の端や、キャンプ場である。「モグラ」も道路沿いである。また、「ノネズミ」は居住地に近い圃場でみられている。ただし、「タヌキ」等に比べ、出会いの場所は多くなく、散在している（図7）。

(5) 総合的にみた出会いの場

全ての出会いをプロットすると、出会いの場所の特徴が明確になる（図8）。第1に、出会いの範囲は、集落内の限られた範囲に収まる。第2に、土地利用との関係では、集落内でもい

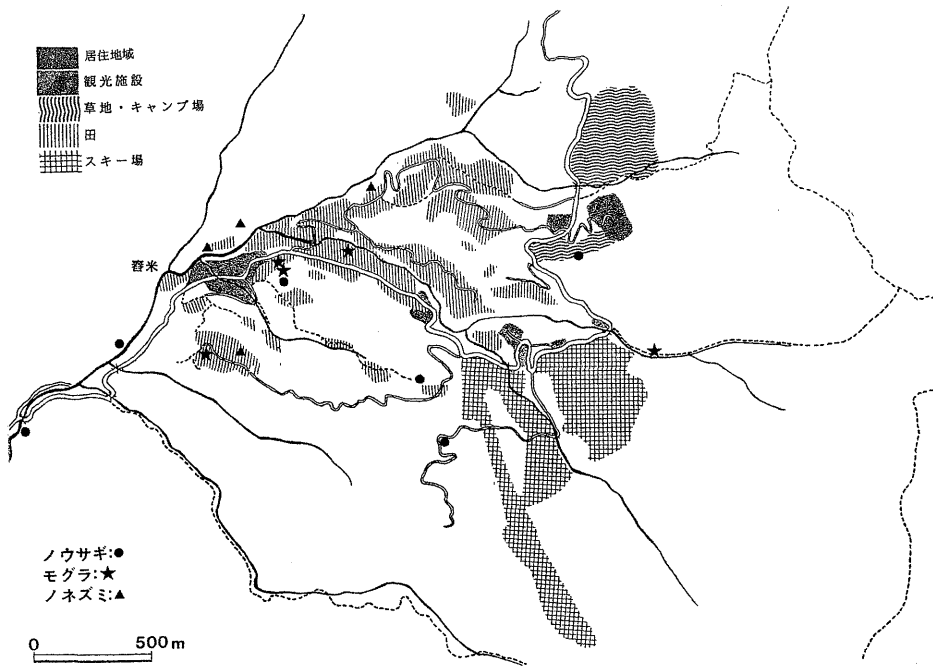


図7 「ノウサギ」「モグラ」「ノネズミ」との出会い地点

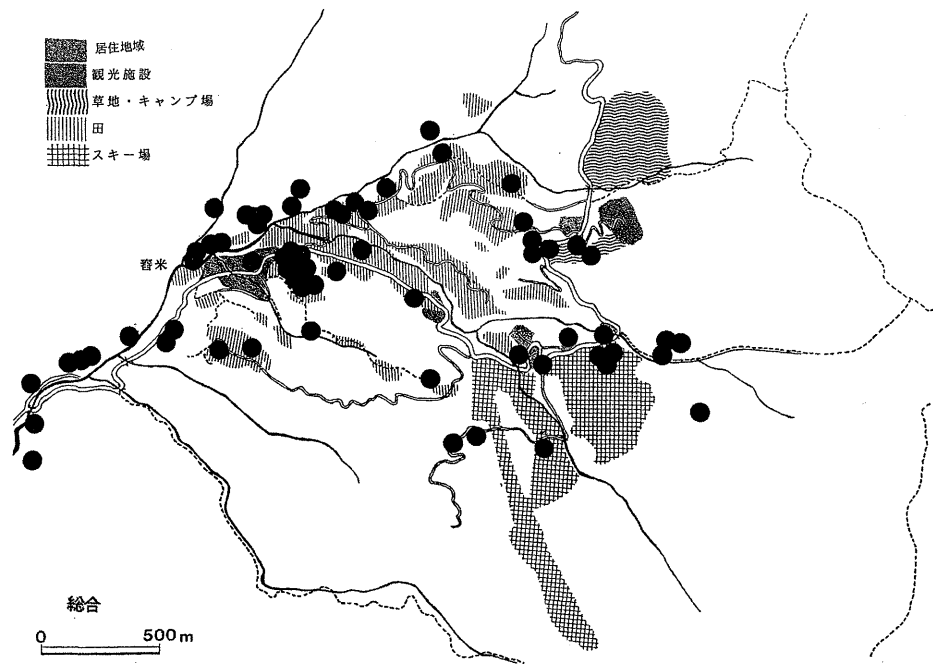


図8 野生動物との出会い地点（総合）

表6 イヌワシの認知

	実数値 (人)	構成比 (%)
見たことがある	36	38.7
名前は知っている	53	57.0
知らない	4	4.3
合計	93	100.0

注 「春米集落アンケート調査」による

表7 イヌワシを見分けられるか

	実数値 (人)	構成比 (%)
できる	38	42.2
できない	52	57.8
合計	90	100.0

注 「春米集落アンケート調査」による

表8 イヌワシを最後に見た時期

時期別	実数値 (人)
この1年以内	2
1～3年前	8
3～5年前	9
5～10年前	11
10年以上前	6
分からない	49
合計	85

注 「春米集落アンケート調査」による

くつかの出会いの場に区分することができる。1つに居住地域、次いで水田、川沿いの造林地、また、スキー場のゲレンデ周辺、さらにキャンプ場のある草地に区分される。第3に、その範囲内でも道路沿いの出会いが多い。第4に、森林での出会いは少なく、森林と農地や疎開地との境界部分での出会いが多い。同時に、田畑での出会いも無視できない。

3 「イヌワシ」の認知

出会いといっても、野生動物の認知の程度については人によりその程度に相当の差があると考えられる。絶滅危険種として「イヌワシ」をとりあげて、集落の回答者の認知を問うた。

まず、「イヌワシ」を知っているか否か、また実際に見たことがあるか否かを聞いた(表6)。「見たことがある」と回答した人は、全体の39%である。また、「名前は知っている」とした人は、57%ある。何らかのかたちで「イヌワシ」は知っているとの答えが多い。

次に「イヌワシ」を見分けられるかとの問いでは、「できる」との答えが42%を占めており、「見たことがある」との回答に対応している(表7)。しかし、「イヌワシ」を「最後に見た時期」を問うたところ、回答には「5～10年前」が最も多い(表8)。しかし、10年以上前からここ1年内まで相当にばらつきが出た。

VI 結 語

以上、アンケート手法により、森林利用行動調査ならびに野生動物との出会い調査を試みた。出会い地点を土地利用図と結びつけ、出会いマップを作成した結果、集落住民と野生動物の関係に注目すべき問題を明らかにすることができた。

第1に、林産物採取の点から住民の森林への関わりをみると、林産物の種類こそ伝統的な生活を残すものの、その行動範囲は狭い。造林地の手入れを含めて、森林利用の行動圏は集落内の居住地域の周辺に限られる。

第2に、野生動物との出会いは森林利用行動の圏内において行われるが、その範囲は森林利用の行動圏よりさらに狭い。居住地域と田畑、レクリエーション施設周辺といった集落圏内に限られる。

第3に、野生動物との出会いの場所を詳しくみると、いくつかの特徴ある土地利用に対応している。例えば、集落道沿いを中心に、居住地域、下流域とのアクセス道路沿い、水田周辺、川沿いの造林地、スキー場ゲレンデ周辺、さらに集落内の草地・レクリエーション開発地である。

第4に、出会いの範囲や場所の特性は、動物の種類によって多少の差がある。しかし、総じて森林内よりも森林と農地の境界部分から農地および宅地にかけてが多い。

上記の結果から、野生動物との出会いが今や日常生活圏内において行われていることがわかる。生活圏の仕切がボーダーレスになりつつあることは、山村の集落環境にとって今後さらに大きな問題となることが予想される。

本研究は、当初に、野生化する環境を仮説的に提示して調査に望んだ。結果は、むしろより直裁に野生動物と生活圏が交錯する事実を引き出した。生活行動を通じて、直接に触れる野生動物の存在がある。しかし、一方で「イヌワシ」のように、知っているが見たことなはないという、情報化された野性的自然が集落生活にも生じていることも事実である。

野生動物に関する論議は、一方で被害を論じ、他方で絶滅を論じる進め方の中で、解決が模索されてきた(4,10)。本研究では、集落環境を中心に据えた新しい視点を提示しようとした。何よりも、集落環境を人間-環境系としてみれば、集落を取り巻く山野への人の出入りが少なくなつたとして、一方的に手つかずの自然状態がそこに増えるとは考えられない。森林とその近傍には、人間の生活と密接に結びつき、あるいは人間の存在を意識して生活する動植物の生息空間がある。動植物に限らず、人間社会の変化に対応した野生動物の行動や分布が生じているのではないか。こうした集落環境の視点に立った研究は未だ始まったばかりである。今後、さらに実証的にデータを積み重ねたい。

謝 辞

本研究に当たって、鳥取県若桜町春米地区の住民の方々から多大のご協力を賜った。とくに記入の難儀な地図付きアンケートに、快く御回答いただいたことに感謝の意を表したい。また、若桜町役場にも資料の提供をいただいた。御礼申し上げます。

文 献

- (1) 伊藤太一：アメリカにおけるウイリダネス保全の変遷（I），101日林論，pp.147～148（1990）
- (2) 伊藤太一：アメリカにおけるウイリダネス法成立の影響，104日林論，pp.313～316（1993）
- (3) 伊藤太一：アメリカの森林環境保全の黎明，京都大学農学部，京都（1993）
- (4) 小原秀雄：人間は野生動物を守れるか，岩波書店，東京（1996）
- (5) 林野庁：鳥獣保護行政のあゆみ，林野弘済会，東京（1969）
- (6) 森林野生動物研究会：森林野生動物の調査—生息数推定法と環境解析—，共立出版，東京（1997）
- (7) 高柳 敦：野生動物資源の持続的利用と生態系保護，国際時代の森林資源問題（有木純善 編著）日本林業調査会，東京，pp.304～315（1993）
- (8) 田中伸彦：アメリカ合衆国ウイリダネス制度制定の経緯からみた森林生態系保護管理政策について，103日林論，pp.229～232（1992）
- (9) 梅棹忠夫・吉良竜夫 編：生態学入門，講談社，東京（1976）
- (10) 由井正敏：野生鳥獣との共存，森林科学 No.11，pp.7～14（1994）
- (11) 若桜町誌編纂委員会：若桜町誌，鳥取県若桜町（1982）